

裏路地探険

先人たちの碑が点在する小さな漁業の町
 風待ちの廻船が訪れた穏やかな港と
 焼き板の家々が味わい深い町並みをつくる

前田純孝の故郷を歩く／新温泉町諸寄

港を囲むように家々が密集した町並みは、どこか懐かしく独特の雰囲気が漂う。

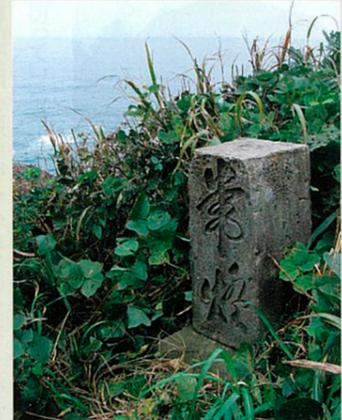
時を経て味わいを増した焼き板の壁や浜へと通じる入り組んだ路地：まるで映画のワンシーンのような風景に惹かれ、キャンバスを手を訪れる人の姿もある。

古くから天然の良港として栄え、北前船の寄港地でもあった諸寄港。東西の岬に囲まれた穏やかな入江は、諸国の廻船が風待ちの港として利用した。

西側の岬は日和山と呼ばれ、昔はここに立って天候を予測したという。高台にある諸寄港日和山灯台の傍らには、廻船の道しるべとなった常燈(灯明台)の一部が今も



路地に入ると焼き板の家々が軒をつらねる。江戸時代は宿場が多かったそうだ。



長年港を見守ってきた常燈の一部。「常夜燈」より古い言葉であることから、江戸時代のもと考えられる。



八坂神社の「幸神丸船給馬」には、絵馬師・吉本善京の落款が入っている。当時、落款入りのものは特に高価だったという。



花崗岩質を含む砂浜は「雪の白浜」と称され、古くは雪行法師の歌にも登場する



東の岬、城山園地からは諸寄が一望できる



純孝が眠る龍満寺は、曹洞宗の修行寺として知られ、多くの高僧を輩出している

残っている。
 港の南端にある為世永神社は、航海の安全を祈願する船乗りたちの信仰を集めた。境内には地元や諸国の廻船業者から寄進された灯籠や玉垣がある。
 また、江戸時代から明治にかけて奉納された5枚の船給馬は浜坂町文化財(現新温泉町文化財)に指定され、現在は諸寄の中心部にある八坂神社祈願所に保管されている。いずれも実在した船が描かれており、その交易記録によると、諸磯砥石(諸寄の語源と考えられる)といわれた諸寄の特産品も積荷の中にあがっている。
 第二次世界大戦が始まるまで、この地域では砥石が産出され、中砥(中間の工程で使う砥石)として全国で重宝された。独特の柔らかさを愛で、遠方から買い付けにくる大工さんもいたそうだ。
 近年は、明治の歌人・前田純孝の故郷としても知られている。病に倒れ、晩年をこの地で過ごした純孝は、死の直前まで短歌をつくり続けたという。

「いくとせの前の落ち葉の上にもまた落ち葉かさなり落ち葉かさなる」
 昭和44年、村の有志によって建立された諸寄海岸の歌碑には、晩年の歌が刻まれている。今も熱心に手入れする人があるのだろう、雪の白浜を背にそびえる歌碑は美しく、清澄な純孝の姿を思い起こさせる。
 純孝にまつわる歌碑や地元出身の先人たちの顕彰碑などは、諸寄に数多く点在している。飛騨平湯の社会教育を指導し、今も「飛騨聖人」と名高い篠原無然や最期の絵師と称される美人画家・谷角日沙春なども諸寄の出身だ。
 偉大な先人たちに共通するのは、この土地に収まることなく、全国各地に活躍の場を広げたこと。海と山に挟まれた小さな漁村は、大海へこぎ出そうという強い意志を育てたのであろう。



1. 谷角日沙春記念碑 2. 諸寄小学校創立百年碑と小学校跡碑 3. 第2回前田純孝賞受賞歌碑「どの道もまっすぐ行けば浜に出る 不思議な村に君は生まれる」 4. 諸寄駅にある篠原無然記念碑



歌碑の説明を聴く参加者の皆さん
 立派な一枚岩を使った諸寄海岸の純孝歌碑



「前田純孝の会」代表の安本恭二さん。廻船の歴史についても研究されている。



●裏路地探険隊員募集
 平成18年1月21日(土)
 「朝来市新井周辺を歩く」
 *実施日の10日前までに、18ページ掲載のT2編集部へ、住所・氏名・年齢・電話番号・「裏路地参加希望」とお書きの上、ハガキでお申し込みください。開催は午前中、現地集合・現地解散となります。申込締切日後、案内を参加ご希望の方へ送付致します。

講師・安本恭二さん